



Key

私は今日もブスの宿命を背負って生きていることを実感させられた。今まで本当にブスでデブだというだけで多くの辛酸を舐めさせられてきたけれど私は相当な馬鹿だからここまで生きてこれたのだと思う。だって合コンに行っても罰ゲームに食べさせられるウンコみたいな扱いしかされないのだから普通の神経の持ち主ではやっていけないんじゃないかと思う。でもタケオはそんなやつらとは違って私のことを少なくとも一人の女としてみてくれていて、でも私を排泄物扱いもしないかわりに優しくしてくれないし綺麗だねなんて言ってくれたことは当然ないので恋愛関係というよりはセックスフレンドに近い関係じゃないかと勝手に考えている。タケオは私のことをエンニチと呼ぶがどうしてそう呼ぶのかはとりたてて聞いたこともないし向こうからも言っではこない。初めて会ったのが縁日だったからそう呼んでいるのだろうと思っているのだけどよくよく考えたら名前を聞かれたこともないような気がしないでもない。

夏休みに同じ女子大に通うカヨコとサナエと行った縁日で二人組の男に声をかけられた。ねえねえ君たち女の子同士で来てるんだったら俺達と一緒に遊ぼうよと一人の男が言うので当然私は無視してその場を立ち去ろうとしたが、サナエったらそうよ女同士で来ちゃいけないのって反抗的な態度に出るもんだからやめなさいよって私はサナエを制したんだけどサナエは続けてあなたたちだって男二人でこんなところに来てるなんて気持ち悪いわよと言ってカヨコに同意を求めた。カヨコが困った顔をしているように見えたので私がいいかげんにしてよと言うとおめえには聞いてないんだよと言って私を睨んで、ねえいいじゃん一緒に遊ぼうよとサナエに向きなおってそう言った。じゃあいいわちゃんと私たちを家まで無事に送り届けてくれるなら遊んであげてもいいわよとサナエが言ってねえカヨコと問いかけるとカヨコは私に済まなそうな顔を一瞬見せはしたもののそうねそれだったらいいかなと言って男たちに笑顔を投げかけた。サナエは私もいるってことを急に思い出したみたいにあっそうだヒロミは帰ったほうがいいよほらあんたん家のお父さん門限だなんだって結構うるさいじゃない、ねカヨコと言うとカヨコもそれもそうねヒロミは先に家に帰ってていいよと私を気遣うような言い回しで私を仲間はずれにしたからそれ以上食いが下がるのもしゃくで素直にそうねそろそろ私は帰るねって言って笑顔で彼ら四人を見送ると彼らが見えなくなるまで手を振り続けた。でもみんながいなくなってしまうと置いてきぼりを食ってしまったことでとっても寂しくなってきたと大声でワンワン泣いていると通りすぎる人が私のことをまるで化け物を見るみたいな目で見てくるから私は恥ずかしくなって人込みを避けて木の生い茂った人気のない所に逃げ込んだ。雑踏を離れるとまたいつもの一人ぼっちになってしまってそうだ私はいつだって一人ぼっちじゃないと思うと二人に置いていかれたことなんてどうでもよくなってきた。柄にもなく感傷に浸って空を見上げると綺麗な満月が私たちを照らしていてあまりの美しさに惚れ惚れしてしまい私もあの月みたいに綺麗になれたらいいと思うのだが百歩譲ってあんなに綺麗になれなくてもいいからせめて月を照らす太陽のような存在が現れてくれなしかしらとずうずうしくも月をお願いしてしまった。

縁日の喧騒を意識的に遮断して虫の声に耳を澄ましているとどこからかあっあっという女の声が聞こえてきたので私は一瞬その声の持つ艶めかしさに狼狽したがそれが男と女の営みによるものだというくらいの知識は持っていたから好奇心も手伝ってその声のほうに向かって歩き始めた

。だんだん大きくなっていく声に耳を研ぎ澄ませているとふと嫌な予感がしたのだけれどその予感的中して私に三メートルほど離れた木の陰から覗き見たその声の主はさっきの男に愛撫されるサナエだった。サナエは浴衣の前をはたけさせられ男は立て膝を付いてサナエの股間を舐めていた。開いた両足の足首でめいっぱい伸びたパンティがその行為の卑猥さを象徴しているかのようだった。

どれくらいそんな二人を見ていたのだろう。うしろから肩を叩かれてはっと我に返り後ろを振り返るとそこには大柄の若い男が立っていて覗きは良くないなと言うので覗いてたわけじゃないの音が聞こえてきたから見に來ただけなのと苦し紛れに言ったが男は鼻で笑って私の言葉なんか信用してないようだった。男は蔑んだ目で私を見つめてお前もやってみようと言った。正直私はセックスに興味があったのでサナエなんかは会うたびにこの前の男は前戯が長すぎるとか言葉でいかされたとかそんな話しかしないし最近ではカヨコもヴァージンを捨てたということらしかったから私だけが取り残されるような気がしていたことも手伝ってこれはチャンスだと思ってええ相手してあげてもいいわと私が言うと男は大声で笑い出した。何がおかしいのと私が慌てて聞くと鏡で自分の顔を見てみなよじゃあな、男はそう言って私に背を向けるとその場を立ち去ろうとした。

「待つて、お願い。私の相手をして」

気が付くと私はそう叫んでいた。今まで聞こえていたサナエの音がやんだのでふとサナエのほうを見るとサナエは私に気がついたみたいでごめんなさいと唾然としている二人に吐くように言って私は男の後を追ったのだがその男こそがタケオだった。

タケオの部屋は狭くて汚いアパートメントの一室だった。部屋のドアを開けると体育の時間の後男子たちが着替えた直後の部屋に入ったときのようなすっぱい臭いがして風呂トイレは共同だったので私は少女が女になる儀式の前にシャワーを浴びることすら諦めなければならなかった。自分で一枚ずつ服を脱いでみろと言われたのだが今日こんなことになるなんて思ってもみなかったから身に着けている下着は擦り切れているしムダ毛も処理してないやらでとつても恥ずかしかったけど勇気をふりしぼって浴衣を脱いだ。服の上から見るよりも随分贅肉が付いてるんだなパンティが腹に食い込んでいるじゃないかとタケオが言ったので恥ずかしさで顔が真っ赤になってやっぱり帰ると言って浴衣を着ようとしたがタケオがこの機会を逃したらお前は一生処女だぜと言った一言で私はその場に留まってしまった。ブラジャーを外せとタケオが言ったので外そうとしたけど緊張して手が震えたせいでホックがなかなか外せなくて、そんな私の姿をタケオはニヤニヤしながら見ているやつの思いでブラジャーを外した私にじゃあ自分の胸をもんでみなと言った。私はあまりの恥ずかしさに気絶しそうになりながらも言われたとおりに胸を揉み続けていたらそのうち気持ちが悪くなってきて吐息が漏れてしまった。パンティを見てもよと言ったので自分のパンティを見たらパンティにはしみができ始めていてお前は淫乱な女だとタケオが何回も言うもんだから私は淫乱な女なんだと思ひ込んでしまい、そう自覚してしまうとたいの事は恥ずかしくなくなったのだからそれはそれで不思議なものだ。タケオも服を脱いだので私たちは裸で向き合うことになったがタケオのあそこは大きくなっていてまるでそれは子供の頃スーパーに行くとき必ずねだって買ってもらっていた魚肉ソーセージのように見えた。タケオは私を

布団の上に横たえさせるとさっきまで身につけていた黒いボクサーパンツを私にかぶせて見えないほうが興奮するんだというようなことを言って私の体に舌を這わせた。タケオは私の顔を見ていたくかなかただけなんじゃないかと後で思ったがその時はタケオの言葉を素直に受け入れた。お前は本当に淫乱だとタケオは何回も何回も繰り返し言った。初めてのときは痛いのだとサナエもカヨコも言っていたが私は痛くはなかったしこんな気持ちいいことが世の中にあるのだと思うとブスに生まれてはきたけれども世の中捨てたもんじゃないと前向きな気持ちになれた。タケオは入れるぞそういうと私の中に勢いよく入ってきたが私はそれが思っていたより冷たかったので不思議に思い男のものは大きくなると冷たくなるんだとそのときは単純にそう思っていたのに目隠しを外されてから聞いた事実に私は啞然としてしまった。タケオの性器だと思っていたものが実はタケオが毎朝使っているヘアスプレーの缶だと聞かされると涙が出てきてヘアスプレーの缶に処女を奪われヘアスプレーの缶を男だと思って愛着すら覚えていたつくづくバカな女、それが私なのだと思うと悲しくなった。私は声をあげて泣いた。ブスに生まれただけでこんな屈辱に耐えなければならぬなんてあまりにも惨めじゃないかと思ったがこのときに本当の意味でブスという存在が持つ宿命を自覚することができた。そんな私を彼は何も言わずに抱き寄せて頭を何度も何度も撫でてくれた。わかっただろ、そう言いながら私の頭をなで続けてくれたが私は頭が悪いから何がわかったかはよくわからなかったけれどブスは強くならなければ生きていけないんだということだけはわかったような気がしたのでうんうんわかったと言いながらタケオの肩に顔を寄せた。

次の日は前の晩家に着いたのが夜中の二時を過ぎていたこともあり昼近くまで寝ているとサナエから私の携帯電話に電話があつて昨日はごめんねと言って謝ってきたので私はタケオと過ごした夜のことをサナエに話して聞かせてやったがヘアスプレー缶のことは言わなかった。サナエが良かったねと安心したような驚いたような声でそう言ったから私はありがとうと言いながらもなんで私のことを置いてきぼりにしたサナエに私があるがどうなんていわなきゃならないのかしらと思いつつも置いてきぼりにしてくれたからヴァージンが捨てられたのだと思ったらサナエとカヨコに心からありがとうといえるような気がしてきた。この埋め合わせに今度はカッコいい男の子が集まる合コンに絶対に誘うからねと言ってサナエは電話を切った。

その合コンが開かれたのは夏休みも終わりにかけていた八月の最後の週末だった。私は以前よりも男を意識するようになっていたのでc a n c a mやJ u n o nなんかを見て男受けのする格好なんかを研究したりしていた。その日は真っ白のワンピースにジーンズのジャケットを羽織って履きなれないヒールの高いサンダルを履いて真っ黒だった髪の毛もブリーチして茶髪にして縦巻きのお蝶婦人みたいだと自分では思った。なのに遅れて待ち合わせ場所に現れたサナエが私を見つけて大笑いしながら近づいてきたと思ったら今年の夏は暑かったもんねってゲラゲラ笑って言うもんだから私はその言葉の真意がわからなくてほんとに暑かったねとその場では答えたけど今考えるとそれは暑過ぎて私の頭がいかれてしまったんじゃないかと言いたかったんだろうと思うとちょっぴり悔しいがそのときはそんなサイテーな嫌味だなんて思いもせずと一緒に笑っていたのだからよくよく私は頭が悪い。お上品な帽子でもかぶったほうがいいんじゃないのときらに声を立てて笑うサナエが言ったのでそうか何か足りないと思ってたのは帽子だったのかと納得してしまったのだが本当に足りなかったのは私のおつむだったのかもしれない。

カラオケボックスに着くと四人の男の子たちはもうすでに部屋に入って待っていてサナエがまず部屋にはいると遅いじゃねえかよかわいい子連れてきたんだろなという声が聞こえてきたので私は武者震いしてしまった。だって私はお世辞にもかわいいとは言えないから。そのくらいのことではわかってる。はれぼったい目に上向きの鼻おまけにデブなのだから仕方がないがそれでもその日は少し自信があった。雑誌で勉強してきたから男の子に受ける会話やしぐさなど色々覚えていたしカラオケでは大塚愛のさくらんぼを振りつきで歌おうと散々練習してきた。サナエの後にこんにちはと言いながらカヨコとサナエの友達のマリコが部屋に入ると男の子の歓声とかかわいいじゃん名前なんていうのって声が聞こえてきたからいざ出陣と言わんばかりに後に続いて私も部屋に入りこんにちはと照れくさそうにうつむき加減の上目遣いで言ってあげたの。本で読んだ限りではその角度が重要らしかったのだけれどおたくどちら様、部屋間違えてるんじゃないという声が聞こえてきたので角度を間違えたのかと思い両腕で胸をはさむようにもう一度こんにちはと言って体をくねらせた。帰れ帰れ帰れ帰れ…そのコールは永遠に続くかのように感じられ気が遠くなりそうだったから私は何がなんだかわからずにサナエに視線を向けて救いを求めた。みんなやめなよヒロミがかわいそうじゃんと言ったにもかかわらず男の子たちは口々にこんなブス連れてくんなよとかおふくろさんが心配してるだろうから早く帰ってあげなとか、私の努力とか本を読むのに費やした時間とか洋服にかけたお金とかみんな知らないくせにっ言ってもしょうがないけど私もここで楽しむ権利はあるって思ったからその場に居すわった。サナエもカヨコも楽しんでいきなよって言うてくれたし私も出会いがほしかったから頑張ることにして私ね大塚愛のさくらんぼ歌おうと思うのかわいいよね知ってる？て言うてるのに誰も返事をしてくれないからカラオケ本とりモコンをテーブルの上から取って勝手に歌を予約した。そしたら三番目にさくらんぼの前奏が鳴り出して男の子たちもおツ誰だ愛ちゃん歌うの誰かな一なんて騒ぎ出したから得意満面に手を上げたら一人の男の子が演奏停止のボタンを押した。私はどうしてそうされたのかもわからなくともう一度入れようとしたが今度は私の隣に座っていた男の子がリモコンを私の手の届かないところに置いてしまったのでリモコンとってくれるって聞いても誰も返事してくれなかった。私が知らない間に王様ゲームが始まっていて色の黒い男の子が割り箸を配っていたから私は気後れを感じながらもどれをとろうか考えていたのに私の分は用意されてなくて私はまた一人ぼっちになってしまったからみんなが楽しんでいるのを横目に見ながら覚えてきた歌を口ずさみ踊りを頭の中で反復させていた。そうしたら一番盛り上がっている男の子が俺王様だよ一じゃあ二番がヒロミにキスと言って私は急に自分の名前が呼ばれたからうれしくなってきたきよろきよろみんなを見回していると、私の一番タイプの男の子が俺だよって言いながら両手で顔を覆ったので確か私とキスするって言ってたわよねってその言葉を思い出して顔が真っ赤になった。そしたら頬赤らめんなよブスってそのタイプの男の子が言うもんだからまたみんながキモイだのうぜえなどと言いながら笑い出して私はなんだか注目を集めていることがうれしくなって下を向いてにやけていると、いきなり頭に空手チョップを入れられたばかりかほらキスするんだよってその男の子が言うから目を閉じて唇を突き出している私の顔にその男は唾を吐いた。気色悪いいんだよと悪態をついて私の両方の鼻の穴に鉤型に曲げた二本の指を入れて私の顔を上に向かせてブヒブヒブヒって豚の鳴き声をまねて言うもんだからサナエやマリコまで笑い出して本当に困ってやめなよと言ってくれたのはカヨコだけだったから私は悔しくて涙が出てきて部屋

を飛び出した。渋谷のスクランブル交差点を大声で泣き叫びながら歩いていると酔っ払いの男が酒臭い息を吐きながら話しかけてきた。姉ちゃん一人で寂しいんだろおじさんといいことしないかお小遣いくらいならあげてもいいんだけどねえなんて言ってきたからこんな私にやさしく声をかけてくれた奇妙なオヤジについていくことにした。ホテルに着くと私はシャワーを浴びると言ったのだが男は浴びなくていいから啜えろと言って芋虫みたいな茶色いものをズボンのチャックを下ろして取り出すとほらほらと言いながら私の頭を押さえつけてきた。私は目の前の芋虫を至近距離で見たのとそれがあまりにも小便臭かったからなんだか怖くなって男の腹部を力いっぱい押すとそのオヤジはよろけてそのまま後ろに倒れたので、もう一目散にその部屋から逃げ出すと私はとても家に帰る気にはなれなくてタケオに会いたい自分があるのに気づくと発車のベルが鳴り響く井の頭線の電車に飛び乗り渋谷駅から各駅停車で四つ目の下北沢駅で下車した。タケオの部屋が目と鼻の先にあってもうすぐタケオに会えるのだと思うとそれまで私を押しつぶす勢いで押し寄せてきていた恐怖と屈辱の波が急に引いて妙に落ち着いてきて改札を出て早足で細い路地をいくつか曲がるとタケオの住むアパートメントが見えてきてタケオの部屋に電気がついているのを確認した途端に緊張の糸が切れてしまって涙が溢れてきた。涙でグチャグチャになった私の顔を見てタケオは不思議そうな顔をしたが何も聞かずに入れよと言ってくれたので私はサンダルを脱ぎ捨てて部屋に上がりかばんを畳の上に放り投げてタケオに抱きついた。タケオは色気づくのは百年早ええよと言いながら肩をさすってくれた。私はなぜだかうんうんわかったありがとうと言いながらタケオに体をあずけると重いから俺にもたれかかるのやめてくれと言われて恥ずかしくなってタケオから少し離れた。セックスしたいんだろとタケオが言うので自分ではよくわからなかったがタケオがそうだって念を押すもんだからそうだと思えてきて洋服を脱ごうとしたら服は脱ぐなとタケオが言って輪投げしようぜとカウボーイが馬に乗って獲物に向かって投げる輪になった紐みたいなものをどこからか持ってきた紐で作って私に向かって投げ始めた。縁日みたいで楽しいなとタケオが言うもんだから私もなんだか楽しくなってきたその紐が幾重にもかけてきつく縛られていくのが快感になってきた。輪投げの後は射的だといってタケオはズボンとパンツを下ろして性器を出すと私の目の前でしごき始めた。タケオのあそこは渋谷で声をかけてきた男のものより大きくて先っぽが綺麗なピンク色をした魚肉ソーセージみたいだとまたしても思ってしまったのだけど、それをおいしそうだなあと思っている自分があるのに気づいてよくよく私は男にも食べ物にも卑しい女だと思った。私は魚肉ソーセージにマヨネーズをつけて食べるのが好きだから後で食べようかなどと考えていると数分後イクイクと言って私の顔めがけて射精した白い精液が付いたタケオのあそこはまさに私の大好物そのものに見えた。私はその夜タケオの部屋に泊まったがセックスはしなかった。私は枕元におかれているヘアスプレーの缶を見てこの前のことを思い出してセックスがしたい気分になったがタケオはいびきをかいて寝ていたので自分の指でパンティの上からあそこを触ってみるとあのとときみたいにパンツが少し湿っていた。ヘアスプレー缶で欲情するなんて私はどこまで淫乱な女なんだろうと思うとなんとか私の前世は女郎だったかもしくは売春婦だったのではないかという考えが頭に浮かんできて取り乱しそうになったが、縁日の夜に草むらで男と絡み合うサナエのことを思い出したら誰だって所詮は淫乱なのだからしょうがないわと思えてきてなんとか自分を取り戻すことができた。

朝目が覚めるとタケオは出かける準備をしていて好きなときに帰っていいから部屋の鍵は郵便

受けの中に入れて置けよと言って私に向かってそれを投げてきた。その日はなんだか彼氏ができたみたいでうれしくて甲斐甲斐しく部屋の掃除をしたり晩御飯を作ったりしてタケオの帰りを待っていると、七時過ぎに仕事から帰ってきたタケオは私がまだ部屋にいて晩御飯まで作っているのを見てぎょっとした顔をして彼女でもあるまいし余計なことすんなよと言って私が作ったご飯には手もつけずに自分で買ってきたカップラーメンを作ろうとお湯を沸かし始めた。私は一人で勘違いして彼女づらしていた自分が恥ずかしくなってじゃあ私帰るからとそそくさと帰り支度を始めたら何事もなかったかのように気をつけてなどと言って玄関まで見送ってくれた。私は男に優しくされたことがないから家に泊めてくれただけでなんとなくこれって付き合ってるのかなとか勝手に思ってしまったけど現実には行きずりのセックスをしただけの間柄であってこれを世に言うセックスフレンドだと思ふとなんとか自分の女としてのステージがワンランク上がった気がしてうれしくなってきた。セックスフレンドを持つことはかわいい女の子の特権だと思っていたから私もそこに近づいた気がしてスキップしてしまった。

その週の金曜日の晩に私はサナエとマリコと三人でまた合コンに出かけた。今日はマリコが大学で所属するインカレサークルの男の子が来るというので待ち合わせの新宿アルタ前に着くと既に男の子たちは私たちを待っていて、でもいつもと違うなと思ったのは私の顔を見て気持ち悪がらないどころか君がヒロミちゃん？会いたかったよなんて言うてくるもんだからなんだかすごく気分が良くなってガードが甘くなってしまった。三人の男の子のうちのトオルという男が私のタイプでサナエにそのことを伝えると私が取り持ってあげるねなんて調子のいいことを言うから私も少しその気になったのがいけなかったんだけど、合コンの終わるころトオルに俺の部屋に来ないかって言われたからすぐについていくのも軽い女に見られると思ったのでどこかで飲みなおさないかと切り出してトオルの住む吉祥寺駅近くの裏通りにあるジェシカというバーに入った。トオルは英文学を専攻しているらしくシェイクスピアの生まれたストラットフォードアポンエイボンというところに生家を見に行ってきた話だとかロミオとジュリエットの主人公になった二人の子孫が今もイタリアのヴェネツィアという街に住んでいるだとか私が知らない話を一人で語って頭の悪い私は理解する間もなく次々に進む話にうん、へえなどと相槌ばかりを打っていた。トオルの目はぱっちりとした二重で睫毛がとっても長くて茶色がかった瞳が潤んでいてそんな目で見つめるものだから私がうっとりしているとじゃあそろそろ行こうかと言うのでこらでいいかと思ってトオルの部屋について行くことにした。トオルの部屋はタケオの部屋と違ってオートロックのついた高級マンションで広いリビングには大画面の液晶テレビとクラブのブースにあるような音楽の機材だと思われるものが置かれているがそれでもまだ十分に広いスペースが空いていて液晶テレビの向かいには真っ赤の革張りのソファが置かれていた。その左奥に寝室があって少しあいたドアの隙間からは大きくてふかふかしているのであろうベッドが見えていたから今夜私はあのベッドで抱かれるのかと思うとすでに体が反応してきて、はやる気持ちを抑えてシャワーを浴びてもいいかしらと言うと一瞬トオルがくすっと笑ったように思えたがバスタオルをもってきてくれてシャワールームはその廊下に出たところの右側の部屋がそうだからということで私は照れたふりをしてうつむいてリビングを出た。

シャワーを浴びてバスタオルを巻いてリビングに戻ってくると俺もシャワー浴びてくるからここで待っててと言いながら寝室に私を案内してベッドの布団を少しめくった。私はベッドに腰掛けてタオルを見送るとシーツにしわができないようにそっと布団に入りタオルを待った。十分後に戻ってきたタオルが電気をつけたままベッドに入ろうとしたので恥ずかしいから電気を消してと私が言うと、君のことをしっかり見ていたいからと言って電気を消すことを拒みじゃあ君が恥ずかしくないように目隠しをしてあげるよと言ってガウンの腰に巻く紐を私の目を隠すように巻き始めた。タケオと初めてやった日も目隠しをされていたわなんて思っているとタオルが私の体に巻いたタオルをそっと剥がした。私がタオルのキスを求めて唇を立てた瞬間、カシャツという音とともに目隠しをしててもわかるほど明るいストロボがたかれて同時に男と女の笑い声が聞こえた。私は瞬時に何が起こったかわからずに目隠しをはずすと、さっきまで合コンしていた男子たちとサナエとマリコが私の足元で腹を抱えて笑っていてこいつブスのくせにヤリマンだって噂は本当なんだと一人の男が言った。私は恥ずかしいとか悔しいとか通り越して悲しくなって見世物じゃないのよと大声で叫んでサナエたちに向かって枕を投げつけた。私はしみのついた勝負パンツもはかずに洋服だけを素早く着ると玄関まで早足で出てきたがもう一度寝室に戻ってタオルのほっぺたを思いっきりひっぱたいたら痛えんだよこのメス豚がとタオルはすごんできたけど私は後ろを振り向かずにはタオルのマンションを後にした。私は見世物じゃないのよ私は見世物じゃないと繰り返し頭の中で叫んでいると子供のころ縁日で見世物小屋のことを思い出した。ひざから下が反対に向いてくっついていたり口が耳の辺りまで裂けている人たちの中にひどく太った豚みたいな女がいてそのおぞましい姿に恐怖を覚えたことを思い出した。私が子供のころ見たのは将来の私の成れの果てだったのだろうか。タケオが私のことをエンニチと呼ぶその理由は見世物小屋にいそうな女だということのような気がして居ても立ってもいられなくなりタクシーを拾うと下北沢のタケオのアパートメントに駆けつけたがタケオは家になくって何で私はエンニチなのと聞きたい気持ちが私の欲求不満をいっそう募らせたのだけれど、ふと郵便受けの中を見るとキーホルダーが付いた鍵が置いてあってそのキーホルダーは縁日のときに私がカヨコたちとおそろいで買ったにもかかわらずタケオの部屋に忘れて帰ったものだったから頭の悪い私はその意味がよく理解できなくってでも心はわかっちゃったみたいでうれし涙が次から次に溢れ出してきた。サンキュー、タケオ。